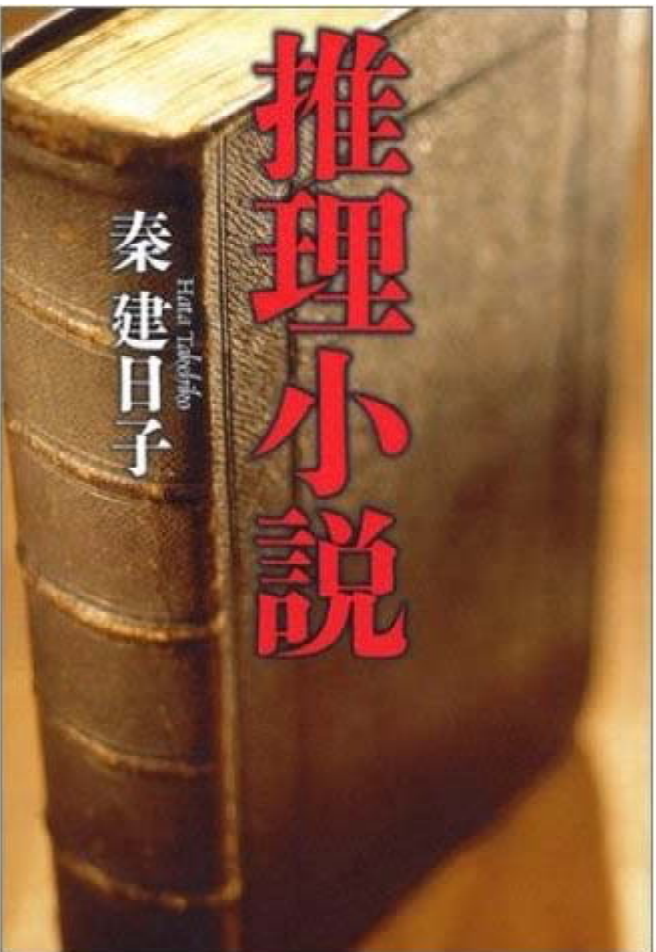


推理小説の種明かし

「推理小説」



こんな広告を目にしたことを思い出しながら、本日のテーマについて検討していこう。題名「推理小説」を白抜きにした作者名「秦建日子」その下にローマ字で「Hata Takehiko」とあってTVドラマ化された。しかし、この時間テレビを見ない私は、このドラマは一度も見えていない。観た方は記憶を甦らせて一筆紹介を願いたい。



※主な作品。

〈小説〉『アンフェアな月』『SOKKI!』『推理小説』

〈映画〉『チエケラッチョ』(原作小説&脚本)

〈連続ドラマ〉『アンフェア』(原作) 『花嫁は厄年ッ!』(7話演出も) 『ドラゴン桜』 『ラストプレゼント』 『最後の弁護士』 『天体観測』

がある。

次に日本の現在知られる推理作家の名前を五十音順にして挙げてみる。

昭和年代：飛鳥高／赤川次郎／鮎川哲也／生島治郎／海野十三／江戸川乱歩／大阪圭吾／泡坂妻夫／井沢元彦／大下宇陀児／大沢在昌／大谷羊太郎／大坪砂男／大藪春彦／小栗虫太郎／香山滋／木々高太郎／樹下太郎／日下圭介／河野典生／甲賀三郎／栗本薫／小峰元／笹沢左保／齊藤栄／佐野洋／島田一男／城昌幸／高木彬光／多岐川恭／竹本健治／陳舜臣／土屋隆夫／都筑道夫／角田喜久雄／戸川昌子／夏木静子／仁木悦子／西村京太郎／浜尾四郎／伴野朗／日影丈吉／水上勉／水谷準／三好徹／森村誠一／山田風太郎／山村美妙／結城昌治／夢野久作／横溝正史／和久峻三／渡辺啓助
平成年代：秋田禎信／浅暮三文／朝松健／芦辺拓／安孫子武丸／阿部智／綾辻行人／有栖川有栖／池井戸潤／井上夢人／今村彩／歌野晶午／大沢在昌／恩田陸／太田忠司／大槻ケンヂ／大原まり子／岡本賢一／小川一水／荻原規子／乙一／加藤文／唐沢なをき／喜国雅彦／北野勇作／京極夏彦／桐野夏生／国樹由香／倉坂鬼一郎／黒崎緑／黒田研二／古処誠二／小林泰三／小松左京／小森健太郎／近藤史恵／今野敏／阪本光一／齊藤肇／桜庭一樹／佐藤亜紀／佐藤哲也／篠田真由美／柴田よしき／島田荘司／殊能將之／菅浩江／瀬名秀明／高里椎奈／高嶋哲夫／高橋克彦『人形たちの家』／高野史緒／竹内真／竹本健治／田中啓文／田中哲弥／月森聖巳／津原泰水／戸梶圭太／鳥井加南子『魔球』／長坂秀佳／夏緑／新津きよみ／二階堂黎人／西澤保彦／貫井徳郎／野尻抱介／乃南アサ／野間美由紀／馳星周／林譲治／はやみねかおる／東野圭吾『放課後』／氷川透／平山瑞穂／福井晴敏／藤田雅矢／藤原ヨウコウ／古橋秀之／法月綸太郎／牧野修／真梨幸子／三雲岳斗／岬兄悟／宮部みゆき／森奈津子／森博嗣／森下一仁／森福都／森見登美彦／矢崎存美／矢島誠／山崎洋子『卒業』／山之口洋／結城恭介／湯川薫（竹内薫）／吉川良太郎／和久峻三／

上記作者のなかで読んだことのある作家はありますか？。読んだ作品とその文体特徴を織り交ぜた「書評」を簡潔に書き上げてみませんか。たとえば、「森見登美彦」さんは、今年度の直木賞候補にノミネートされている作家です。

※森見登美彦の作品から <http://allabout.co.jp/interest/mysterynovel/closeup/CU20070319A/>

推理小説めいた表現「……めく」

○やむを得ず、私は彼女の名前を騙かたることにした。さすがにそのままでは犯罪たがめしてしまうので、「水尾」ならぬ「氷尾」として、彼が錯覚してくれるよう期待することにした。「遠藤さんへ 氷尾より」と丁寧な字で書いたカードを添えた。『太陽の塔』文庫93頁⑫」

○高敷は酒豪なので、持参の酒瓶を一本抱え込み、飲むにつれて砂鉄のような無精髭の奥でにやりたがにやりと謎めいた笑みを湛たがえ始めた。なにがおかしいのか分からない。『太陽の塔』文庫134頁」

《事件づくり》

「むささび・もま事件」〔文庫41頁〕

「京大生狩り」…学生が襲われる事件〔文庫104頁〕

「ソーラー招き猫事件」〔文庫〕

象徴語表現【ふわふわ／ふはふは】

『太陽の塔』〔単行本、新潮文庫〕日本ファンタジーノベル大賞受賞作。『四畳半神話大系』〔単行本〕

木立を抜けて、広々とした草原へ出て行くと、遠くをふわふわと歩いて行く彼女が映る。『太陽の塔』99頁、文庫112頁)

遠い昔、私という男が誰からも愛されるふわふわした可愛^{かわい}いものであった頃、『太陽の塔』101頁、文庫115頁)

下宿に戻り、洗面器に湯を張って足を浸した。凍えきつた足先が湯を含んでふわふわと膨れてくるような気がした。『太陽の塔』184頁、文庫207頁)

駅のホームで歩行ロボットの真似^{まね}をして、ふわふわ不思議なステップを踏む。『太陽の塔』201頁、文庫226頁)

ふわふわと酔いしれつつ、さすがの私も考えた。『太陽の塔』202頁、文庫228頁)

「嘆かわしい嘆かわしい」と彼は言いながら、良い匂いのする葉巻の煙をふわふわ夜風に流している。

『四畳半神話大系』15頁)

「あのね、君。俺は、俺のような人間を理解できる女性は嫌だ。もっと何かこう、ふはふはして、繊細妙で夢のような、美しいものだけで頭がいっぱいな黒髪の乙女がいい」(『四畳半神話大系』41頁)

私がふわふわとした口調で訊ねると、彼女は眉をひそめて口に人さし指を当てた。(『四畳半神話大系』45頁)

京都の街中、たとえば河原町三条から西へ、アーケードの中をふわふわ歩いているものと思つて頂く。

『四畳半神話大系』75頁)

羽貫さんはやや足取りがふわふわしていたが、酔いはさめてきたらしかった。(『四畳半神話大系』120頁)

彼女はやみなべから出てきた正体不明の熊のぬいぐるみをふわふわと弄びながら、暗い夜道を歩いた。

『四畳半神話大系』123頁)

もっと何かこう、ふはふはして、繊細微妙で夢のような、美しいものだけで頭がいっぱいな黒髪の乙女の愛が欲しいのである。(『四畳半神話大系』158頁)

スポンジ製のふはふはとした灰色の熊で、まるで赤ちゃんのように柔らかい。(『四畳半神話大系』248頁)

「それは何ですか？」私は訊ねた。彼女はふわつと眉を緩めて笑った。「これはもちぐまですね」と言った。(『四畳半神話大系』273頁)

何でも彼女は色違いの同じ熊を五つ持っていて「ふわふわ戦隊モチグマン」と称して大切にしているらしかった。(『四畳半神話大系』273頁)

○車内灯はいつの間にか消えて、日光がふんわりと車内に満ちた。温かい。『太陽の塔』文庫161頁)

◆その他の象徴語表現

そうやってふくふくと我が身を慈^{いづく}しんでいると、ドアがノックされて、湯島の声が出た。「文庫208頁⑤」何かを隠すようにふくふくと笑う。彼女は黙る。彼女は怒る。彼女は泣く。そして彼女は眠る。

『文庫227頁』ぶくぶくに。「文庫69頁」クリスマスに太陽電池で動く招き猫贈ったのが問題であったか、それとも自分の好物という理由だけで鰻の肝を食べさせて彼女の身体にぶくぶくと蕁麻疹を作らせたのが問題であったか、それともいつまでたっても宇治十帖を読めなかったのが問題であったか、彼女に太陽の塔を見せたのが問題であったか、あるいは、あるいは——あるいは彼女には理解できない

いほどに私が偉大であったのか。まさか。「文庫 228 頁」もごもごと。「文庫 208 頁」ぱくぱくと。「文庫 212 頁」がぶがぶ。「文庫 72 頁」チカチカと「文庫 33 頁」ぴたぴたと。「文庫 44 頁」ぶつぶつ。「文庫 56 頁」もごもごと読経するような声が、波に揺れるように近くなったり遠くなったりした。「文庫 208 頁⑨」ぞわぞわし。「文庫 91 頁・123 頁」ごしやごしや。「文庫 99 頁」てらてらと。「文庫 122 頁」びゅうびゅう。「文庫 125 頁」ごごごと。「文庫 136 頁」ぬめぬめと。「文庫 147 頁」もしやもしやと。「文庫 148 頁」もぞもぞと。「文庫 148 頁」うがががと。「文庫 149 頁」野原のまわりは、うるうると水を含んで盛り上がるような森に囲まれていた。「文庫 162 頁」すうすうと。「文庫 170 頁」かたかた。「文庫 171 頁」ゆらゆらりと坂道を上っているうちに、先ほどの遠藤のやり取りが思い出されてきて、ふいに私は立ち止まった。「文庫 171 頁」とつつこうひつつこうと右往左往する若人が後を絶たなかったのは言うまでもない。「文庫 173 頁」パリパリパリと。「文庫 179 頁」ぴうぴう。「文庫 179 頁」ぴしぴしと。「文庫 180 頁」ぴんと指で弾くと、招き猫はゆらゆらと手招きを始めた。「文庫 185 頁」ゆらゆらと。「文庫 186 頁」ぐずぐずと。「文庫 190 頁」見ると、横断歩道を屈強な男たちがわらわらと渡って来る。「文庫 192 頁」よく噛みもせず詰め込んだ食物をげふげふ消化しつつ、彼は附属図書館に入った。「文庫 194 頁」ぐりぐりと。「文庫 194 頁」ぽこぽここと。「文庫 194 頁」夕暮れのざわざわと浮き足立つ祇園を歩いていると、かえって居心地の悪さを感じた。「文庫 196 頁」。にもかかわらず、なぜ彼らはああも嬉しそうに、幸福そうに、ほくほくと満足しているのか。「文庫 204 頁」折悪しく雨は勢いを増し、私はぐしよくしよに濡れそぼった。「205 頁」奥さんはころころと笑った。「文庫 206 頁」鰻の肝をばくばくと食べている我々を、道行く人が面白そうに眺めていた。「文庫 212 頁」にやにやと。「文庫 218 頁」けらけら。「文庫 219 頁」ぶらりぶらりと。「文庫 224 頁」顎の絆創膏が剥がれかかって、ぴらぴらしていた。「文庫 224 頁」ぽんぽんと。「文庫 225 頁」ちびちびと。「文庫 229 頁」しんしんと。「文庫 229 頁」ひらひらと「文庫 229 頁」

動詞「ふるえる」「震」の上接語表現と伏線模様

○「高野の本屋にでも行っているのだろうか」と考えつつ、つま先に染み通ってくる寒さに震えていると、駐車場の暗がりから人影が現れ、私に近づいてきた。『太陽の塔』21頁、文庫 26 頁)

唇は薄く、キツイ言葉を吐くときに微妙に震えていることを私は見逃さなかった。『太陽の塔』23 頁、文庫 28 頁)

○自分が玉子豆腐のようにふるふる震えていたことなどおくびにも出さず、あたかも自分の威光の前に私が罪過を悔いてひれ伏したかごとき情景を彼女に伝えるに違いない。『太陽の塔』26 頁、文庫 31 頁)

○怒りに震えつつ、私がもうもうと煙草をふかしていると、『太陽の塔』40 頁)

○瘦せたお姉さんが店番をしていた。彼女は美人ではあったが、つねにふるふる微細に震えているような、精神的危うさを感じさせる人だった。『太陽の塔』63 頁、文庫 73 頁)

○数ヶ月前から、彼女の欲望は珈琲豆だけでは満たせなくなり、対象はより大きなものへと変化して来て、やがて柔らかい小動物がいきいき悲鳴を上げるのをがりがり粉微塵にしては夜な夜な歓喜の笑みを浮かべるようになったのだった。などと、私は店先で勝手に妄想し、勝手にふるふる震えたりしていた。そうやって私がふるふるしているうちに珈琲は挽き終わる。『太陽の塔』63 頁、文庫 73 頁)

○一度見てみるべきだとは言わない。何度でも訪れたまえ。そして、ふつふつと体内に湧き出してくる異次元宇宙の気配に震えたまえ。世人はすべからく偉大なる太陽の塔の前に膝を屈し「なんじや

こりやあ！」と何度でも何度でも心おきなく叫ぶべし。『太陽の塔』103頁、文庫117頁)

○新人部員の間にはいまだ何の絆きずなも培つちかわれておらず、我々は独りぼっちでプルプルと震えながら、

○先輩連中の値踏みするような視線に耐えねばならなかった。『太陽の塔』113頁、文庫128頁)

○飾磨は両手を広げて自分を見下ろし、わなわなと震えた。『太陽の塔』文庫138頁)

○夕闇の底を冷たく鴨川が流れていた。我々はがたがた震えながら、橋の上をそぞろ歩く男女に呪いの言葉をわめき散らし、『太陽の塔』156頁)

○我々はポケットに手をつこんで立ちつくし、いろいろな寒さに震えていた。『太陽の塔』157頁)

○私のような男がクリスマスイブの四条河原町でみつともなく晒し者になって打ち震えているところは誰にも見られなくなかった。『太陽の塔』190頁)

★私はやや武者震いしながら、遠藤からの報復を待ち受けて日々を過ごした。『太陽の塔』文庫96頁)

○思わず私は神々に対する怒りで震えた。もつとほかにすることはないので。『四畳半神話大系』18頁)

○「むにゅつとしました、むにゅつとしました」彼女はまるで幽霊にでも出会ったように顔面蒼白になってがたがたと震え、何度もそう言っていたのだが『四畳半神話大系』44頁、101頁)

○「小津に恋人がいるんですか？」私が怒りに震えた。『四畳半神話大系』118頁)

○とうてい私には御しがたい状況だと思つて、生まれたての子鹿のようにふるふると布団の中で震えていたが、『四畳半神話大系』157頁)

○小津に対する怒りに打ち震えながら、私は高瀬川に沿つてぶらぶらと歩いていた。『四畳半神話大系』167頁)

○当初の自信はもろくも崩れ去り、雨に濡れた捨て猫のようにふるふると震えていたことは言うまでもない。『四畳半神話大系』178頁)

○その間、塀の影に隠れていた私はふるふると震えていた。『四畳半神話大系』198頁)

○小津の手配してくれた隠れ家に速やかに逃げ込み、相島長官に見付からないように息をひそめ、生まれたての子鹿のようにふるふると怒りに震えていた。『四畳半神話大系』257頁)

○前年の秋、「香織さん誘拐計画」から逃走した後、私は隠れ家に籠もつてふるふる震えていた。『四畳半神話大系』265頁)

井上夢人『あなたをはなさない』(週刊ポスト、一九九二年)

○身体が震えていた。震えが、どうやっても止まらない。震えているにもかかわらず、額と脇の下から汗が染みだしていた。(20頁)

綾辻行人『十角館の殺人』(講談社文庫)

○痩せた身体からだをぶるりと震わせて、ヴァンは心許なげに笑った。(21頁)

東野圭吾『眠りの森』(講談社文庫)

○タクシーを拾うと、石神井公園に行つてくれと告げた。未緒は加賀の右腕を掴んだまま、小さく震えていた。その震えが濡れた髪の毛のせいだけでではないことを、加賀は直感的に感じとっていた。公園に着く頃には未緒の震えは止まっていた。そして雨もやんでいた。(189頁)

○でも、と靖子はいい、胸の前で組んだ掌をぶるぶると震わせた。(309頁)

すべてを聞いたあとで未緒は震えながらいった。(314頁)

この「震える」ということば表現は、推理小説にとって場面状況を構成していく上で重要なキーワードとなることばであることにお気づき願えればありがたい。この表現が例えば、上記の『眠りの森』では後半部に集中して登場してくるのも大いなる特徴であった。

作家綾辻行人は、『十角館の殺人』(「講談社文庫」)で、「僕にとって推理小説は、あくまでも知的な遊びの一つなんだ。小説という形式を使った、読者対探偵、読者対作者の刺激的な論理の遊び。それ以上でも以下でもない。」(10頁)とし、「1DKのマンションでOLが殺されて、靴底を擦り減らした刑事が苦心の末、愛人だった上司を捕まえる。——やめてほしいね。汚職だの政界の内幕だの、現代社会の歪みが生んだ悲劇だの、その辺も願ひ下げだ。ミステリにふさわしいのは、時代遅れと云われようが何だろうが、やっぱりね、名探偵、大邸宅、怪しげな住人たち、血みどろの惨劇、不可能犯罪、破天荒な大トリック……。絵空事で大いに結構。要はその世界の中で楽しめればいいのさ。但し、あくまで知的に、ね。」(10頁)と言わしめている。

漢語表現「視線」と混種語表現「めせん」「目線」「まなざし」「眼差」

—東野圭吾『眠りの森』から—

○彫りの深い顔だちで、やはり目線には険しいものがあり、精悍な印象を未緒は受けた。(『眠りの森』15頁)

○確証ってどういうものかをいうのだろう——未緒は太田に訊こうかと思ったが、彼が自分の手帳に目を落としてしまったので、隣の若い刑事に視線を向けた。(『眠りの森』19頁)

○未緒は彼の横顔を見て、それからまたフロントガラスの向こうに視線を戻した。(『眠りの森』22頁)

○一人一人の踊りに、全員の熱い視線が集中する。それはバレエ団の団員が逮捕された翌日といえども、何も変わらないのだ。(中略)梶田は鋭い視線を、順次各自の踊りに向けていく。(『眠りの森』38頁)

○彼女は加賀しゃべるのを真剣な眼差しで見っていたが、少し間を置くように瞬きしてから、「ありがとうございます」と唇を緩ませた。(『眠りの森』61頁)

○そして刑事相手に目をそらしたりするものかと、挑戦的な視線を向けてきた。(『眠りの森』45頁)

○未緒は下を向き、それからまた加賀の顔に視線を戻した。(『眠りの森』62頁)

○彼がいうと、マスターはちらりとカウンターの隅に目線をやった。と同時に、そこで飲んでいた女が顔を上げて加賀の方を見た。(『眠りの森』120頁)

○鋭い目線がせわしく動いたかと思うと、最後は膝を叩いて舌打ちをした。やがて加賀は未緒の視線に気づくと、一瞬うろたえたように目をそらせ、それから照れたように笑みを浮かべた。(『眠りの森』138頁)

○柳生を『さん』づけで呼ぶことに、加賀はほんの少し抵抗を覚えた。彼の挑むような目線を思いだしたからに違いなかった。(『眠りの森』165頁)

○「だから」といって靖子は回りに素早く視線を配り、亜希子の方に身を乗り出した。(『眠りの森』174頁)

○彼女の方も加賀を見て驚いているようすだ、妙子は加賀の目線を追って未緒を振り返ったあと、「あたしが誘ったの」と楽しそうにいった。『眠りの森』 236頁」

今回、東野圭吾『眠りの森』に見える「目線」「視線」「眼差し」の三語について考察してみることにする。この三語使用のそれぞれのことばの特徴を分析してみようではないか。

この「視線」と「目線」だが、上の「シセン」は、和製語として明治中期の医学用語（「視軸」↓「視線」視線（ヘヒフツレイン）或は視軸（ゲヒフツアス）と云ふ『新精眼科全書』一八六七年）から明治後期に一般語化（「視線を鋪版に着けて」森鷗外『玉を懐いて罪あり』一八八九年）した。これに対し、下の「めセン」の語は「視線」と表記しても「めセン」と読む例もある。これは本来、芸能界用語（演劇・TV・映画など）から流出して、現在では新聞記事にまで及んでいる語である。新明解『国語辞典』初版（一九七二年、三省堂刊）に、「視線」の意の俗語的表現。」と記載する。山田俊雄『詞苑間歩』下（一九九九年、三省堂刊）には、「近頃メセン（目線）といふ語が、演劇・TV・映画の世界から流出してゐるようだが、一部の社会の符牒だから紳士が使ふには、いささか躊躇せられる恥づかしい語であらう。「視線」は、なほ新鮮さを失った用語に墮したものでなければ、難解でもないから決して悪くはない。「267頁」と記載している。また、池田俊二『日本語知らない俳人たち』で、「雛納め目線さびしや筆筒の上（五・二） 「目線（「めせん」と読むのでしよう）」などという品の無い言葉が聞かれるようになって、もう三十年経つでしょうか。それをよくもまあ俳句の中に使えますね。」という。実際に、田中栄三『映画俳優準備読本』（映画日本社、一九四一年刊）では、「それから顔面表情の中で、特に重要な点は、眼の動きである。眼の表現である。眼の付け所である。与へられた役を理解して演技をしてゐるかどうかは、演技中の演技者の眼を見てゐれば直ちに判るものである。「125頁」という具合に「眼の付け所」と表現していたからだ。

花園大学教授橋本洋行さんは、二〇〇七年度春季“近代語研究会”で「めせん（目線・眼線）」の成立と展開」を口頭発表してこの語の発生・交錯について論じた。橋本は、「視線」は行為・意志が強いのに対し、「目線」は見ているという行動のみを示しているという。

このことばの先行調査には、岩淵匡『日本語反省帳』（河出書房新社刊、二〇〇四年）があり、「視線」「まなざし」「目線」の語で、「①子どもと同じ「視線／まなざし／目線」で考える。②「視線／まなざし／目線」を合わせる。③あたたかい「視線／まなざし／目線」をそそぐ。④冷たい「視線／まなざし／目線」を感じる」「85〜86頁」を紹介している。

これを受けて、関西四つの大学の学生を対象に橋本さんはアンケートを実行している。

- 1 熱い／をそそぐ
- 2 冷たい／を感じる
- 3 子どもと同じ／で考える
- 4 彼（または彼女）の／が気になる
- 5 面接の時は、面接官と／を合わせて話をするようにしなさい
- 6 話の途中で／をそらすのはやめてほしい
- 7 カメラ／で見る
- 8 その人の奇抜な衣装に、皆の／が集中した
- 9 相手が動きを／で追うのが、上手な演技のコツである
- 10 あの人のあたたかい／のおかげで、安らかな気持ちになった

この結果、1、「そそぐ」「感じる」「集中する」との共起は、「視線」が優勢。2、「位置・高低」及び「立場」「見方」の意味には「目線」が優勢。と結論している。

現代、「□□のやり場に困る」は、新聞記事に両用されている。推理小説作家が用いるこれらのことばについても、今後その影響を見逃してはなるまい。そこで、受講者の方々に同じくアンケートを試みることにした。